

「きさ」小中一貫教育目標 「自学力の育成」 ～自ら学び、考え、自立した行動ができる『きさ』の子どもの育成～

平成29年2月16日(木)、吉舎小学校において今年度最終の『平成28年度「きさ」小中一貫合同研修会』を開催しました。

2月という多忙な時期に多くの方にご参加いただき、誠に感謝申し上げます。皆様からいただいた貴重なご意見を参考にし、更なる実践の積み重ねをしていきたいと思っております。ありがとうございました。

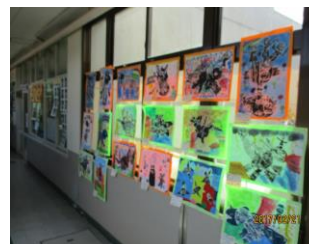
◇高知大学 大学教育創造センター 特任准教授 杉田 郁代 先生から「自学力の育成に向けて」のご講演をいただきました。ご講演のポイントは次の通りです。



連続性

○生徒指導の視点

- ・教科指導×生徒指導
- ・校内環境を創る。
(花のある学校・ギャラリーのような廊下・頑張りの見える写真やノート・ありがとうの木の掲示等) ⇒メタ認知の促進
⇒自信・自己肯定感
⇒自学力の向上



○授業創りの視点

- ・自学力育成に向けて、学習環境が重要であり、指導と支援の2つの側面が大切。
- ・全学年のキラリノート掲示(方略のポイントを可視化)
⇒まとめてリーフレットにすると自学力にもつながる。
- ・「手立て」「見通しを持たせる工夫」「承認欲求を満たす」
- ・指導と支援(見通し・手立て) ⇒無意識を意識的に。
- ・既習の確認の可視化(手立て、つなげる、今日と昨日のドッキング)
⇒発砲ボードに貼って貯めて、次年度に生かす。《おたすけ算数ボード》
- ・個人思考につながる見通しの持たせ方が大切。
(クローズ: 視点ははっきり、キーワード、観点を示す)
- ・個別指導と支援
手立ての可視化(使うキーワードやヒントカード)・赤ペン丸付
- ・課題設定の工夫(日常的・身近な問題・具体物)
- ・算数的活動(具体的イメージを持たせる、実際に動いて違和感を感じさせて気付かせる、日常に活用する)
- ・活躍の場を作る(発表回数記録で活躍を可視化)
⇒相手意識を持って大きい声で発表をさせる。
- ・指導を徹底する姿勢
- ・操作活動+話し合い活動(ワークシートに個人思考を書いて集団思考に入る) ⇒算数でのグループは3人がベスト
- ・教えないといけないことは教える。



○9年間を見通して(自学力の育成に向け是非とも中学校で引き継いでいただきたいこと)

1. 見通しを持たせる学習の継続。
2. 小学校6年生の学習リーダーの継続。

アンケートにご協力いただき、誠にありがとうございました。アンケート結果は、次の通りです。
 [A：よくあてはまる B：あてはまる C：あまりあてはまらない D：あてはまらない] (アンケート回答者 21人)

	評価項目	評価			
		A	B	C	D
1	児童が「分かる・できる」と思う授業でしたか。	52%	48%	0	0
2	児童は、解き方の見通しを持ち、意欲的に課題解決に取り組んでいましたか。	71%	29%	0	0
3	児童は、先生や友達の話から、「聞いて・考えて・つなげる」学習を行っていたと思う授業でしたか。	57%	39%	4%	0



～アンケートの記述から～

- 個人思考・集団思考とも児童たちはよく自分の考えをまとめていました。既習内容等を丁寧に確認し、具体物を活用した“見える”授業を実践されているからだと感じました。自分の考えを自信を持って発表できるような支援を私自身していきたいです。
- 子ども達は、一生懸命課題解決に向けて取り組んでいました。思考力をつけるという意味では、集団解決からまとめに向けて支援のあり方の工夫が必要だと感じました。教材研究をしっかりとされていました。
- 児童の意欲的な発言から、普段の授業の様子も捉えることができました。日々の積み重ねの取組の中で、児童が主体的に学ぼうとする姿勢を感じました。ねらいに対して、児童が課題解決に向けて、前時に学習したことを振り返りながら、問題を解こうとする姿勢や授業者の問いかけにも聞く姿勢、学習規律もできていました。安心して授業を一人ひとりの子どもたちが受ける学習環境もされていて、子どもの自学力の育成をしていく手立てについて学ばせていただきました。
- 既習事項の掲示を参考にさせていただきます。児童の作品など学習環境がとても整っていました。
- 子どもたちがとても意欲的に学習していました。授業を受けている子どもの姿から先生方が日々どのように子どもたちと関わられているかがよくわかりました。

《今後に向けて》

- ◇引き続き、「学習者基点の学び」（児童生徒の知的好奇心を高めるために、児童生徒の経験や既有知識を踏まえ、児童生徒の思いや願い、考えなどを大切にしながら、教科等の目標を達成させるために必要な学習内容や効果的な指導方法を取り入れ、学習活動を組み立てていくこと）を大切にしながら授業を構築していく。
- ◇全体として発表の声が小さい状況にある。生徒指導の三機能を意識した授業を行うと共に、教科における指導にとどまらず、全教育活動を通じて自己肯定感を向上させる方策を講じる。
- ◇教師⇒児童への働きを縦糸とするならば、児童⇔児童は横糸である。「個が響き合う授業」を創造していくために、「インタラクション（相互作用）」の機会と場の設定、評価を行っていく。
- ◇「深い学び」につなげるために、集団思考場面での練り合いをどのように仕組むかについて実践を通し、有効な実践事例を積み上げていく。

最後に、今回、このような研修の場を与えていただき、また、参観者の皆様から貴重なご示唆をいただきましたことに吉舎小職員一同感謝申し上げます。ありがとうございました。